

体感。感動。感謝。NBUのCOC事業をお伝えします。

文部科学省
地(知)の拠点



日本文理大学COC事業

おおいた、つくりびと

coc-nbu.jp

July 2016

Nippon Bunri University, COC MAGAZINE



ともにつくり、育てよう。 地域の笑顔が生まれる場所。

大分市佐賀関地区にある、木佐上小学校の跡地が今、
子どもたちからお年寄りまで、たくさんの人が集い
笑顔が花咲く「地域コミュニティー」の拠点へ生まれ変わる。



No. 08



▲協定書に署名し、がっちりと握手を交わす木佐上連合区の幸野幸人連合区長とNBU平居孝之学長。

閉校した小学校が今、 新しい地域の『がっこう』へ。

NBUは、平成19年8月に大分市と包括連携協定を締結。佐賀関地区を、大学が取り組む文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」の活動重点地域と定め、地域が抱えるさまざまな課題に取り組んでいる。

今回の舞台は、佐賀関木佐上地区。のどかな風景に抱かれた里山だが、少子化の影響から平成26年度末に木佐上小学校が閉校。現在、高齢化率が約50%(平成28年3月現在)となるなど、地域の賑わいやつながりが薄れつつあった。

そこで、NBUでは、木佐上小学校の跡地を活用した新しいコミュニティづくりをスタート。木佐上連合区と連携を図り、話し合いを重ねながら、ついに平成28年6月4日、木佐上コミュニティセンター開所の時を迎えた。木佐上連合区の幸野幸人連合区長とNBU平居



▲「このキャラクターは何という名前なの?」子どもたちと同じ目線でコミュニケーション。

孝之学長が協定書を交わした開所式。「小学校が閉校し、寂しさを感じる住民が多かった。大学生の皆さんとふれあえる場ができて嬉しい」と、幸野連合区長より期待の言葉をいただいた。

地域の未来を担う 子どもたちのために。

オープニングセレモニーの後、まずは、経営経済学科のこども・福祉マネジメントコースの学生たちが、地域の小・中学生とコミュニケーションを図る。これは「アイスブレイキング」と呼ばれる、初対面の人同士が出会う時、その緊張をときほぐすための手法。将来、社会福祉士を目指す学生たちが中心になり、授業で学んだことをベースに、一緒に自己紹介をしたり、絵を描くなどのプログラムを用意してきたのだ。最初は少し緊張気味だった地元の子どもたちだが、積極的に話しかける大学生の言葉に次第に目を輝かせはじめる。随分と場の空気が和らいだところで、次のコーナー、同学科の地域マネジメントコースの学生たちが担当する「おおいパネルクイズ」とビジネスソリューションコースの「コンビクイズ」がスタート。「おおいパネルクイズ」では、宇佐神宮や原尻の滝など、大分各地の名所がパネルクイズ形式で紹介される。自分の郷土の歴史や魅力について楽しみながら学

若者の情熱で地域に元気を。 木佐上コミュニティセンター誕生。

地域の人へ、「つながる」楽しさと喜びを届けよう。

大分市佐賀関木佐上地区は、高齢化率が約50%となり、少子化が進んでいます。失われつつあるコミュニティの賑わいと元気を再び取り戻すために、NBUでは、平成26年度末に閉校した木佐上小学校を拠点とした、新しいコミュニティづくりにチャレンジ。『郷土愛を育む～大分について学ぼう～』をテーマに、木佐上コミュニティセンターのオープニングセレモニーを企画し、地元の方々と、「共に生きる地域」への第一歩を踏み出しました。



▲教室の黒板を使って「おおいパネルクイズ」がスタート。大分県内の名所を楽しみながら、子どもたちと一緒に学んでいく。

んでほしいと、学生自らが問題を考え、パネルなどを準備したのだった。司会の学生が、「やったね!」「おっ!よく解ったなあ!」と大きな声で会場を盛り上げると、子どもたちも身を乗り出すようにパネルを見つめて、大はしゃぎ。クイズ終了後に、盛り上げ役の一人、レスリング部の学生が「今度来た時はレスリングを教えるねと約束したんですよ」と笑顔で語った。今後はさらにスポーツやものづくりなども加わり、大学生と地元の子どもたちのさまざまな交流が、木佐上コミュニティセンターで生まれてゆくのだろう。



▲大学生と触れ合うことに、最初は戸惑っていた地元の子どもたち。でも、アイスブレイキングのレクリエーションですぐに仲良しに。

高齢者の心に寄り添い ITの可能性を伝える。

子どもたちの笑い声が響くなか、2階の教室では、同じく工学部の情報メディア学科の学生たちによる高齢者向けのIT教室「楽しめるIT」が開催されていた。高齢者が多い木佐上地区では、子どもや孫と離れて暮らすお年寄りも多い。一人暮らしの方も少なくないので、次第に地域とのつながりが薄れ、孤立化が進むのではという懸念もあった。今回、学生が企画したのは、スマートフォンやタブレットの機能活用術。高齢者はそれらの機器を持ってはいるものの、あまり使いこなすことはできていないことが事前調査で判明していた。視力が落ちたり、老眼になった方に対しては、カメラ機能を拡大鏡の代わりに使って雑誌や本を読んだり、物忘れをしないために「ビデオ機能」をメモとして使ったりと、単なるITツールの使用方法ではなく、高齢者の皆さ



▲自分たちには当たり前でも高齢者にとってITツールは扱い慣れないもの。だから、ゆっくり丁寧にアドバイス。

んの生活シーンを思い浮かべながら「これは便利だ」と興味を持ってもらえることをセレクトした。慣れない手つきのおいちゃんやおばあちゃんの隣に寄り添う学生。「タップ」、「スライド」などの表現はなるべく使わず、一緒に動作を確認しながら分かりやすい言葉で説明しようとする姿が印象的だった。LINEアプリを使って、自分が撮影した写真を隣の人に送る練習をしながら、「これなら子どもや孫にも送れるなあ」と楽しそうにしていた高齢者の皆さん。学生たちも「すぐに使い方を覚えてくれましたね!」と驚いていた。

コミュニティセンターの施設内には、機械電気工学科の「水中ロボット」や災害発生場所を空撮できる仕組みを紹介する展示コーナーも設けられていた。今後も、旧木佐上小学校のプールを利用して、水中ロボットの開

NEWS

地元メディアも注目する、 閉校小学校舎の 新たな可能性。

大分県内各地には、閉校となった学校校舎が数多く点在している。地域住民にとって、教育の場として親しんできた校舎をどのように再活用していくのか。大学と地域が共に考え、かたちにする木佐上コミュニティセンターに注目が集まっている。

※掲載記事は許諾を受けています。

学生たちの活躍は、NBUのCOC特設サイトをチェック! [nbu coc](#)

検索



▲歴史ある地域の学び舎が、再び輝きを取り戻し、未来へと歩みはじめる。

発などが行われる予定だ。いよいよ本格始動した、木佐上の新しいコミュニティ拠点。地域の図書館や生涯教育の学び舎として地元の皆さんが集うことはもちろん、特別授業や地域交流のステージとして学生が活用するなど、地域の皆さんと大学生が、お互いの可能性を引き出し「つながり」を深める場として、これからも進化を続ける。



▲大学で研究が進む水中ロボットを展示。最新のテクノロジーが佐賀関の海で大活躍するだろう。



キラリびと

『おおいた、つくりびと』で活躍する学生、
教職員、地域の皆さんにインタビュー。

08



経営経済学部
経営経済学科3年

柴田 凌馬

Q. 「木佐上コミュニティセンター」の
オープニングイベントでは、どんな
活動に参加しましたか？

A. 当日は、地元の小・中学生に、2種類のクイズコーナーを準備していました。学生同士の打ち合わせで「子どもたちにイベントを楽しんでもらうために、まずは緊張をほぐしてもらいたいね」という意見が出て、子どもたちの気持ちをリラックスさせてあげるレクリエーションタイムを設けました。そこで僕が主に担当したのは、「ふれあい」をキーワードと一緒に絵を描いたり、小さなグループになって、お互いに自己紹介をするコーナー。学生同士で話し合い、子どもたちに楽しんでもらうには、まず僕たち学生が楽しむことを心がけました。

Q. 子どもたちと同じ時間を過ごす中で、
感じたことや学んだことは何ですか？

A. やっぱり自分の心を見せなければ、子どもたちも見せてくれないということですね。教える

側という立場や年齢を気にせずに、一緒になって作業をしたり、アニメのキャラクターなど子どもたちの方が詳しいことは、逆にこちらが教えてもらうことで、自然と距離は近くなりました。最初は「楽しくない」とつまらなさそうにしていた女の子が、最後に「楽しかった人？」と聞いたら、いちばん最初に手を挙げてくれて…。とても嬉しかったですね。

and more...



PICK UP! COCプロジェクト

2016.05.29 **佐賀県地域 子どもたちとのあぜぬり体験**

現代版 あぜつくり

雨の降りしきるなか、小学生たちは合羽に長靴を履いて準備万端。でも、いざとなると泥が体につかないようにと中腰になり、なかなか一步を踏み出せない様子。それを見ていた大学生が「楽しむってこういうことだ」と言わんばかりに、泥の中に突っ込んだ。「ぎゃははは！」大きな笑いととも、まるでフライパンの中で弾けたポップコーンのように一斉にはしゃいだ子どもたち。ちらっと横目で見ると、ママが頷いて笑ってくれていたおかげで、ひと安心。

田んぼにソリが走ると、泥んこのしぶきが

舞う。「そうそう、その調子。みんなの“元気”を盛り込んだ良い土ができるぞ」大学生にとっても、土と水が混じり合ったなめらかな感触と、人と人がふれあう温かみを体全体で感じられた一日になった。

時々こんなふうに、雨の中を傘もささずに泥んこにまみれたりすると、生きる“原点”に戻れる気がする。「生きているって最高!」。

まだまだあります!
大分県内をステージに進行中の
プロジェクトが盛りだくさん。

- 初夏のエネルギーで育つ“感じる心”
- 初夏の風物詩のどんこ釣り大会
- 森林ボランティアで学んだこと

etc...



くわしくはNBUのCOC特設サイト **coc-nbu.jp** へ